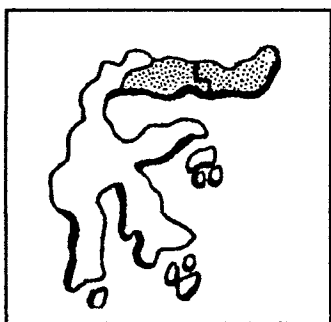




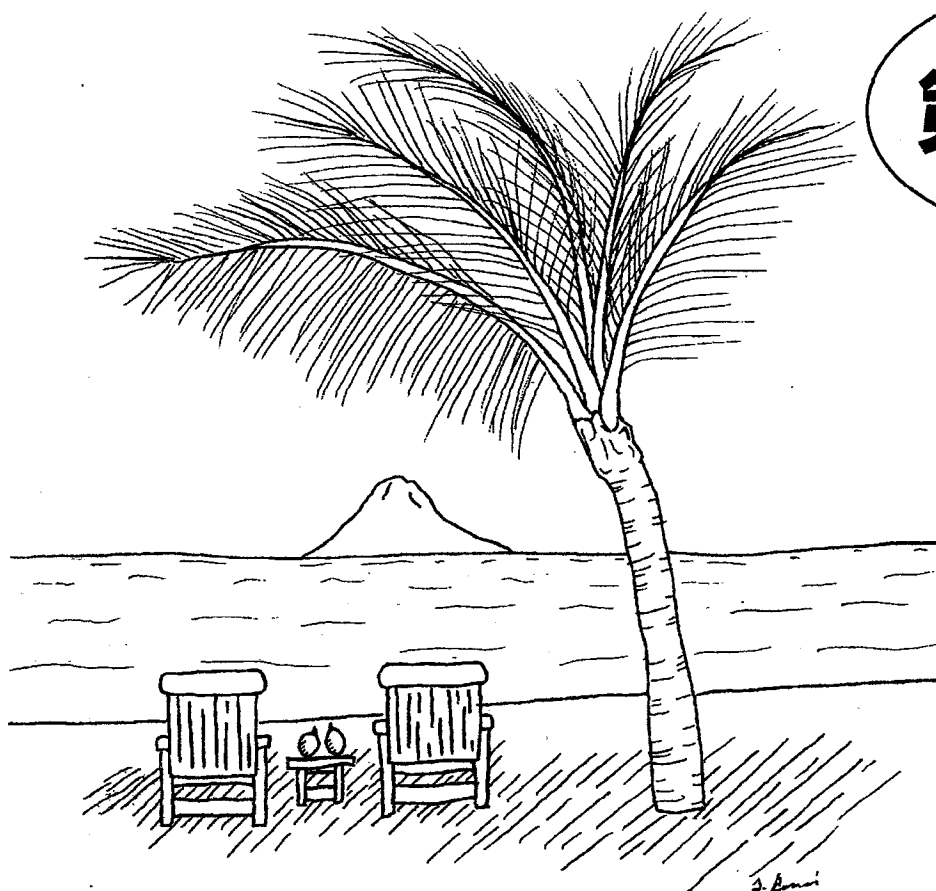
北スラウェシ日本人会
NORTH SULAWESI JAPAN CLUB

日本人会会報

Tarsius

タルシウス

第21号



第 21 号 (平成 23 年 8 月) 目 次

1. 弔辞	平野 健	2
2. (遺稿) 浜岡原発中止	川口 博康	5
3 入会挨拶 : 北スラウェシへ吸い寄せられ	下村 まゆみ	1 1
4 : ハイキング マハウ山	江田 直美	1 3
5 : マナドでの生活	小山 直美	1 4
6. : スラウェシ島との縁	柴田 ちひろ	1 5
7 関野吉晴—古代カヌーの旅完了	長崎 節夫	1 6
8 自転車サークルの会員募集	今泉 宏	1 9
9 日系人メモ (2) 大城 ミレイ	長崎 節夫	2 1
1 0 平成 23 年 3 月 11 日	長崎 節夫	2 4
1 1 会員名簿		3 0
1 2 編集後記		3 2

追悼

皆様、ご周知の通り平成二十三年七月三十日に、北スラウエシ日本人会、名誉会員である川口博康さんが、他界されました。

北スラウエシ日本人会が設立されて以来、昨年の青木次郎さんに続き、お二人目になります。

北スラウエシ日本人会設立当初より、精力的に活動に参加していただき、話題作りに欠くことがなく、いつも直球で意見を語って頂いたのを昨日のように思い出されます。

ビトン市に駐在された当初、「こういうところに来ることができたんだ、日本で出来ない事を思いっきりやらにやいかんラ」と、

遂にはトモホン市内に、すばらしい邸宅まで建てられた次第でした。建築半ば、「こんなに立派な家を建てられて、老後永住されるのですか？」とお聞きしたところ、「違うんだよ、遊び心だよ遊び心。こんなスケールのプラモデル、サラリーマンの俺には日本じゃ無理だけどここなら出来るだろ？楽しいよね、少しずつ組みあがっていく姿を眺めるのは」と言われた言葉が今でも鮮明に脳裏に焼き付いています。

クラブット山への山登り、ミナハサでの激流下りなど、駐在期間中本当に色々なことに勢力的に挑まれていました。

遊び心が旺盛なせいか、現地では大人は滅多に罹らないデング熱に侵され、ご家族を呼び寄せるほどの騒動になったこともありました。

退院後、「船頭で漁船に乗っていたときも色々あったけど、今回ほどこれはマズイなと思ったことが無かったダ、だから家族みんなを呼んだダイ」少年博康君の退院後の感想でした。

定年退職で日本に戻られた後も、やはりじっとしていることが出来無かったのでしょう、NPO法人「手火山」を立ち上げられました。日本の食文化、鰹節に対する想い。その原料を担う当地北スラウェシへの想いが強く後押ししたのでしょう。

私共も「手火山」の名誉会員として招いて頂きました。

年に一度、「手火山」のメンバーを募っての現地視察旅行の際に行われるトモホン邸での懇親会は、本当に楽しいひと時でした。

民族舞踊鑑賞、和イ折衷の多彩な料理。在留邦人の一部の人達は、暫く日本へ帰っていないせいか、まだ握っていないカルフォニア米酢飯を茶碗にとっておいしそうに食べてるのを見て、「何だみんな、今から旨い寿司になるのに待ちきれナードカ？」と嬉しそうに話し

ていたことを思い出します。

長老の域に達していても驕ることなく、いつも我々の視線で接してくれていた故人。

もつともつとお会いして、もつともつと色々なお話を聞かせて頂きたかったです。

人生の大先輩に合掌、安らかにお眠り下さい。

北スラウエシ日本人会 代表幹事 平野 健

菅直人首相は6日夜、緊急記者会見を行い、中部電力に対して浜岡原子力発電所にあるすべての原子炉を停止するよう要請したと発表した。停止要請の理由として、「今後30年以内にマグニチュード(M)8級の東海地震が発生する可能性が87%」という予測が示された。この突然のニュースに地域住民は政府に対し大きな不信感を持ってしまった。

私はこの突飛な発表に対して政府への幾つかの不信感を持つようになった。地元住民に対する説明責任を問いたい。

* 浜岡原発は国策として民主党も原発推進の先頭に立っていた。法や規制に従い「国のお墨付きを得て」運転してきたはず。

* 多くの住民は受入を快く思っていたわけではない。そこには国策として大きな力がプレッシャーとしてあった。

* 地震がきても絶対安全であると国も中電も事あるごとに言い続けてきた。今迄の説明は嘘であったのか。もしそうであれば我々を欺いていたことになる。この政府はいかなる事にも国民に謝ることを知らない。

* 国の耐震基準を満たしており、震災後に経済産業省が各電力会社に指示した緊急安全対策にも対応していると理解している。

* 「今後30年以内にマグニチュード(M)8級の東海地震が発生する可能性が87%」と言っている。何故今頃になってこの数値を言いだすのか。この数値は既に平成20年1月1日地震調査研究推進本部 地震調査委員会

によって発表されている。(ちなみに宮城県沖地震に対しては99% マグニチュード8.0となっている) この発表を真剣に受け止めていれば今回の災害は防げたのではないのか。

* にもかかわらず、何故、浜岡原発のみを停止対象にしたのだろうか。この点、「浜岡だけは地震のリスクが各段に高い」という理由を政府は示しているが、緊急安全対策では、そのような大事なことが考慮されていないのだろうか。

*わざわざ政治決断というパフォーマンスをしなければならない本当の理由は何なのでしょう。アメリカからのプレッシャーとも聞いていますが――

* 政府情報が信じられない住民の一人として何故なのかを話してもらわないと腹の虫がおさまらない。確かに、浜岡原発は東海地震の想定地の中心に立地しているが、他の原発地域でも直下型地震の可能性は否定できない。

* 原発と共生することをモットーとしてきた地元の一人としては納得のいかないことが多すぎる。

* 都市部の住民は原発をどう考えているのだろうか。危険は地方にかぶせて「原発反対」を叫んでいる。いつも地方は泣かされている。かっこよすぎる。原発で出来た電機は誰が使っているのか。

* 原発の設立に関わっていない県知事さんや多くの若い政治家・TVに出ている若いコメンテーターの皆さんは『政府の大英断』とよろこんでいる。

私もすなおに喜びたい。しかし、原発には歴史がある。特に立地住民の苦能があることを理解してほしい。

イカンマス記

浜岡原発 全面停止

9日中電は政府の要請の受入を決定した。

「大英断」と喜んでいる人達も沢山いる。私は悔しいことが先に出てしまう。

喜んでいる人達に問いたい。原発からの電気がどのようなものかを考えたことがあるのだろうか。立地住民のことをどのように考えてくれていたのか。

この発表がある前日まで政府も中電も原発は安全ですと言い続けてきた。私は一抹の不安はあるにしても信用せざるを得なかった。今となっては騙されていたことにやっと気付いた。国策に翻弄される立地住民のことを考えている人は少ない。

こうして作られた電気を使い生活を謳歌している都会の人達には立地住民の苦しみは分かるまい。

県知事初め何人かの首長は「大英断」と評価している。どなたも本当に立地住民のことは何も考えてくれていないことはその言動でわかる。政治家とはこの程度の人達か。

この政党の特徴は行動を起こす前に何故必要なのかの説明は無い。八場ダム・普天間・事業仕分け・H2O 削減・TPP など数えたら切りがない。全て政治パフォーマンスでぶち上げその後は処理できなくなり投げ出してしまう。

今回の件も恐らくまとめ上げなくて投げ出すのではと思っている。

いずれにしても今回の中止で民間の経済の縮小は避けられないでしょう。市は「交付金は従来通り」との回答を買ったと言っている。しかし、市民税等は減少するのは間違いない。

市の産業が簡単に方向転換できるのか。

交付金で潤っていた市民は自立の精神を忘れてはいないか。

我が町御前崎は大きな転換期に入ろうとしている。

国策に騙され二度と悔しい思いをしたくないと思う。

イカンマス

平成 23 年 6 月 20 日

川口 博康

浜岡原発が停止してから一カ月が経った御前崎

管総理の突然の原発の中止要請によって「御前崎は世界で一番危険な町」となってしまった。住民の原発への不安は確実に広がっている。あれから 1 ヶ月が経った。

電力会社・政府共に原発の安全管理について完全に信用を無くしてしまった今、誰が安全に対し、住民が納得するお墨付きを与えるのか。

住民は不安が高揚するだけで心休まる時は無くなっている。企業は地震リスクへの備えを始めた。私の知っている企業も真剣にこの地からの脱出の検討に入った。

商工関係者は地域経済の破綻を危惧している。観光客は激減、特に韓国からのお客さんは 0 となっている。日本一のお茶の生産県でもある静岡県で放射性物質の検査で NO の判定が出た。フランスに送ったお茶からも NO の判定で焼却処分となってしまった。

管総理の一言で我が町、御前崎は経済と原発の安全性について先が見えない為、不安の重い空気が町を覆っている。今、我が町、御前崎は大きな試練に立たされている。

どこに向かってカジを取るのか。今迄、原発と深く関わって来た人程大きな転換期となるでしょう。市では原発関連交付金削減に対して予算の組み直しを実施した。市議会は議員の定数・給料の削減などについて議案を提出した。しかし、議会は否決した。

一方、再生可能エネルギーに太陽光発電を立ち上げると民間の孫社長がぶち上げた。

これに多くの首長が県民に説明もなく賛同している。素早い行動ではある。

民間の企画にこれだけの首長が即座に参加するのも初めてではないか。私の独断ですが、孫社長が行政を取り込みたい目的は農地の休耕田を太陽光発電の用地としての許認可を得たい為だと思います。今の法律で農地の転用を考えたらず出来ないのでないでしょうか。孫社長のヒラメキ・悪知恵は今迄の手法をみれば納得してもらえらると思う。経営がきれい事ではないことは多くの方が承知しています。しかし、この機を取込むネットワークの良さにはさすがですね。震災発生当時、今回の災害に対して義援金として 100 億円を出すとの報道があり大きく新聞を飾っていた。しかし、未だに提出したとの事実はないとの報道もある。

いずれにせよ孫社長の新しく事業を立ち上げるチャンスを掴むのに上手であることは間違いない。一方、これに賛同した首長はうまく利用されたものよとその軽薄な行動に失望せざるを得ない。静岡県の知事もその一人ではある。時代のうねりに乗り遅れてはと感じたのでしょうか。この種の人達は今迄、電力・エネルギーの問題についてただ使

うだけで作り・供給する立場で苦労したことはなかったのではないのでしょうか。
彼らの言動をみていると現場の苦労は何も理解されていない。
何故、県下の再生可能エネルギーを研究している人達を応援しないのか。

今回の災害が想定外であったことを受けて、再生可能エネルギーについてこの頃のテレビは無責任な人達を引っ張り出して来て好きなことを言わせている。
今、原発反対を唱えていれば天下に怖いもの無しである。

電気・食料を始め多くの物資が都市部に住んでいる皆さんに供給されている。
ここに住む人たちは平気で当然のごとくこれらの物資を消費し生活をしている。
この人達は供給する者の痛みには理解しようとはしない。今回も脱原発を声高に訴えている。対策は何も伝わってこない。要求のみである。
私は今回の件で都市部の皆さんが田舎の事を理解していないことを味わった。対策もなく、今の消費生活のレベルを維持しながら、平気で原発反対を唱えている人達。今の日本で一番怖いのは「自分は正しい、悪いのは貴方達だ」というエゴがはびこりだしていることではないのでしょうか。まるで弱いもののいじめですね。学校・多くのコミュニティがこの手法を取り入れ、どうにもならなくなっているのが現実ではないだろうか。

国会を見ていると、先ず自分の所属する党が生き残る為の政策づくり(マニフェスト=支出ばかりが記載されている) 確かに国民には受けを良くしてある。選挙があるから当然ではある。国のお金を使えるだけ使って国民に幸せを与えよう。しかし、この為に使ったお金は今ないので子供や孫の代に支払ってもらいましょう、となっていますね。

我が家でも確かに支出ばかりを考えている時の家計は楽しい。あれもこれも買いたいことを並べてみるときは快感でもある。しかし、収入を改めて眺めてみると買いたいものは殆ど無くなってしまうのが我が家の現実である。

国民の欲望を満たすことは政治の基本でしょうか。この事を実行する条件としてはお金が回る範囲内ということにはならないのでしょうか。今生きている自分達だけが良ければ良い。実際にはそう思っていないでしょうが結果的にはそうになっていますね。

このことはでこの 2-3 年の政治に幻滅しています。酷すぎます。

私はこのままいったら日本国はデフォルトすると思います。本気で考えています。笑わないでください。私が 1997 年にインドネシアに駐在した翌年には経済危機によって東南アジア各国を危機が襲いました。この時に北スラウェシ日本人会が設立され今日に至

っているわけですね。身の危険も感じました。

当時のことを語る人は少なくなっています。

インフレも中途半端ではなかった。インドネシア銀行はお札の印刷が間に合わなくて変なお札が出回った。為替も 1/6 となり今に続いています。

色々な会社で泣いた会社、笑った会社に分かれた。個人的には外貨貯金が引き出せなくてルピアを南京袋いっぱいもらいとまどったこともあった。

当時のインドネシアは正にデフォルトであったと思います。どんな国の高官も直前までいや、デフォルトになっても大丈夫と言っていた。今の日本も大丈夫と言っている。

私は今の日本人の精神構造に責任という部分が無くなっていることから行きつくところまで行くのではと思っています。

デフォルトを見込んでの対策としては

日本金での貯金・現金は可能な限り少なくし、外貨に換えておく事と思います。おそらくもの凄いインフレとなるでしょう。

今回の災害を政府は戦後最大の国難と位置付けている。

復興資金は凄い額で膨れ上がっている。膨れ上がる支出に対して収入はまたもや借金で賄わざるを得ない。借金は増えるが復興以外の支払は切り詰めてはいない。本当にこの国はやっていけるのか。無限に拡大する国民の欲望と党の利益優先でのサービスを満たす為の支払は毎年増えるばかりだ。借金以外の税収入は増えない環境にある。

借金の歯止めも政権が変わったことで何もない。本当に日本の国はやっていけるのか。

膨大な借金は子・孫が支払う仕組みを作り平気である。これからも無限に増え続ける政策を打ち出して政権維持を図っている。恐ろしいと感じる。こんな国家が長続きするわけがないと恐れ慄いています。

政治家は誰のために仕事をしているのか、国会議員ともなれば国の為に汗を流し、命を賭してこそ国民のリーダーたりうるのではないのか。国会議員の仕事は国民の欲望を満たすためのみではない。国家をどうするかを決めて、リードしてほしい。

イカンマス

北スラウェシ日本人会の皆様、こんにちは。このたびは、栄えある「タルシウス」デビューの場を賜り、誠にありがとうございます。僭越ながら、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

私は2008年1月に北スラウェシへ移住して参りました。現在はビトゥンで暮らしています。夫はサンギルとゴロンタロの血を引くムスリムです。したがって私もムスリマで、断食(だけは)しています。

信仰心はさておき、私が身を置く環境下では、断食を、しない勇氣より、する勇氣の方が 簡単です。「お腹が空いたら昼寝をなさい」という義母のアドバイスを胸に、移住初年に人生初の断食に挑んだ結果、断食月はそこそこ楽しいものであるとの結論に達しました。

皆様もご存知のとおり、当地の伝統的慣わしに「食卓を囲んで家族団らん」の文字はありません。唯一断食月に限り、イスラムの家庭では、家族全員、時には+αで、一日2回の食事を共にしながら語らいます。その光景は、昔々に父、母、祖母、私、弟2人の6人で囲んだ食卓を、懐かしく思い起こさせるものでした。

また、元・葬式仏教徒の私にとって、一年365日、24時間、常に宗教を意識することは正直困難です。しかし、断食月を年に一度のイスラム月間と考えれば、日頃の怠惰な自分を戒める良い機会であるとも思えます。

自己紹介に話を戻して、私の趣味はランニング、と言いたいところですが、当地の気候、道路事情、苦楽を共にできるランニング友達の不在等に理由を求め、北スラウェシ在住となって以降、まともに走った試しがありません。ランニングにハマるのは(SMの)Mのタイプの人間という定説があります。ラン好きの方はもちろん、M系を自認される方がいらっしゃいましたら、ラン友になっていただけませんか？

ちなみに、私のベストタイムは、フルが4時間58分、ハーフが2時間9分。はっきり言って遅いです。そんな私のラン暦における唯一にして最大の自慢は、第一回東京マラソンに当選したこと。2007年2月18日、冷たい雨が打ちつける大東京の目抜き通りの42.195kmを、順番待ち30分×2回のトイレ渋滞を経て、6時間半をかけてゴールしました。続いて翌年の第二回東京マラソンにも当選。これにて生涯のクジ運を使い果たしたと思われまふ。

テーマをインドネシアに移して、私のインドネシア初訪問は1988年です。親に外国人との交際を禁じられた友人がバリ島へ逃避行をし、友人の「いいところだから遊びにおいで」の誘いに乗ってバリ島へ。数年後にバリ島を再訪し、ついでにジャワ島にも渡り、アザーンの調べが覆う夕刻のジョクジャの街並みに、何とも言われぬ哀愁を覚え、胸がキュンと鳴ったのを今でもよく覚えています。以降、毎年インドネシアを

旅行するようになります。

まずはジャワ島を廻った後、スマトラ島へ上陸。西スマトラのムンタワイのジャングルで水浴びをしながら、「インドネシアにハマった私」を確信しました。その後、北スマトラを経て、ヌサンタラ最西端のサバンを目指してアチェの地を踏み、アチェの虜に。ところが、その数年後にはアチェ情勢が悪化。ならば今年は南スマトラ、のはずが、スマトラ南部で地震が起き、目的地をトラジャへへ変更、したものの、ふと「やっぱり山より海だ」と感じ、出発の2週間前に航空券の行き先を変更。こうして2000年の初夏に北スラウェシに初上陸を果たし、我が夫と出会いました。

皆様も、偶然はたまた必然の積み重ねを経て、北スラウェシへ吸い寄せられ、現在に至っておいでのことと存じます。私たちが、日本ではなく、北スラウェシで出会ったことも、神様のお茶目な悪戯の一環なのかも知れませんね。

北スラウェシ日本人会の皆様、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

ハイキングマハウ山

江田 直美

北スラウェシ日本人会の皆様 こんにちは。
今年2月の健康相談の際に、私も日本人会に入会させて頂きました。
これからもよろしくお願いします。

先日、マハウ山へ行って気分爽快！楽しかったです。
森林が清々しいのは 木々に含まれる「フィトンチッド」という成分のおかげ。
心身を健やかに、リフレッシュ、リラックス、疲労回復の効果もあるそうです。
皆様も機会がありましたら、ハイキングや森林浴に出掛けてみませんか？
以下、我が家的一天を紹介します。

朝

09:30 快晴 Woloan 自宅から車で出発。

09:45 Pasar Tomohon 手前の山道に入る。
車のエアコン、ラジオを消し、窓を全開。新鮮な空気と風が気持ち良い。

10:00 マハウ山麓 到着。
いちご農園を発見！
フレッツさんというオーナーの男性が、快く農園の見学に応じてくれた。
甘酸っぱくて、オイシ〜いちご！3パックお買上げ！@Rp15000

山頂まで20〜30分の所まで、登山道が整備されていて、今回はそこまで車で行く。

10:30 マハウ山中腹。
段々畑が美しい。トンダノ湖もきれいに見えた。

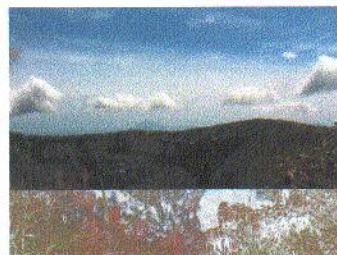
11:00 駐車場、キャンプエリアに到着。
少し急斜面だが、娘の「抱っこ〜」の声を無視！？
いえいえ、「ガンバレ〜」と励ましながら、家族3人山頂を目指す。

11:20 あっという間に山頂到着。
ロコン山 ブナケン島にマナド（メナド）トゥア島の展望を愉しむ。
鳥の声、風の音が耳に心地よい。。。ああ〜キモチがいい〜！！

12:20 我が家の恒例、ゴミ拾いをしながら下山。

12:40 Tataaran の温泉へ。
のんびり。。。ああ〜極楽、極楽！

14:00 帰宅。
カラダも心もスッキリ！！次はどこへ行こうか〜。



マナドでの生活

小山直美

去年 10 月に太原さんの後任としてポリテクニックマナドに赴任しました小山と申します。
任期は 2 年ですので、残り 1 年半ほどですがよろしくお願いします。

私は以前、東ジャワのマランに 4 年ほど住んでいたことがあります。こことマランとの生活の違いについて少しお話ししたいと思います。

まずは教会の多さです。ご存じのとおり、ジャワ島は約 9 割がイスラム教徒なので教会よりもモスクの方が断然多いです。学校の授業もお祈りの時間に合わせて組まれています。そしてその他にも日曜の礼拝や **ibadah** など、宗教的な生活習慣の違いがたくさんあるので私にはとても新鮮にうつります。

それからマナドには中華系、ヨーロッパ系、日系など、色々な人種の人々が渾然一体となっていて暮らしているのが特徴的だと思います。古くから交易が盛んだったことでそれを特別不思議に思う人は少ないのでしょうか。上下関係もそれほど強くはなく、言いたいことははっきり言う。この点もジャワの人々とは感覚が随分違うなあと思っています。

食事は新鮮な魚が毎日食卓に上るのはうれしい限りです。またピサンゴレンをダブダブという辛いソースで食べる習慣もジャワにはなかったのでびっくりしました。しかもおいしい。癖になるおいしさでついつい食べ過ぎてしまいます。

マナドは坂がとても多いというのも驚きでした。ここに来る前は自転車での移動を考えていましたが、一瞬でその考えを改めました。なので毎日の移動はマイクロレットです。これもジャワのものと少し違うので最初は少し戸惑いました。「muka」と言って降りるのもそうですが、私が感じた一番大きな違いはあの大音量で音楽を鳴らす点ですね。ずいぶんにぎやかだなあというのが第一印象です。あまりにうるさくて時々閉口しますが。それから台数の多さです。これは坂が多いマナドではマイクロレットが移動手段として一番便利だからなのでしょう。ちなみにojekも他の場所よりも多いと思います。

2009年2月に初めてスラウェシ島・マナドに降り立ったこの日のことは、2年以上経た今でも心に残っている。その日、朝の飛行機でジャカルタを発ち、これから待ち受ける新たな生活に期待と好奇心で胸が高鳴っていたのは勿論のこと、4時間の飛行時間にそろそろ飽き始め、ようやくマナド上空に差し掛かったときに機内から覗いた景色は、おそらくそれが市街地を思わせる白や灰色の四角い建物が海沿いに連なり、かと思うと、しばらくして一面ヤシの木の緑一色で、屋根の赤い色がぽつぽつと散らばり、あの屋根の下にどんな人が住んでどんな物を着て、どんな生活をしているのだろうと考えるとぐっと興味が強まる思いだった。

3年前、自分が青年海外協力隊員・理数科教師としてスラウェシ島に派遣が決まったとき、その報に一番に喜んだのは祖母ではなかったか。

それは、第2次大戦中に祖父が派兵されたのがこのスラウェシ＝セレベス島だったからである。その祖父は他界してこのとき既に4年、生前もわたしが直接祖父の口から大戦中の話を聞くことはなかったが、盆や暮れに集まった親戚の口から想像する限り、銃を持ってそれを驕ったりする人ではなかったと思う。祖父の家に置いてあるソフトボール大くらいのアルミの器はセレベス滞在中に支給されたものらしく、形もところどころ凸凹しているが、祖父がこれを大事にしており、ときどき祖母にこれでミルクを温めてもらい飲むのを好んでいた。

セレベス島といっても南北に長く、祖父の派遣先がマナドかマカッサルかは知らないものの、北スラウェシに送られた日本兵はビトゥンの港から引き揚げたと聞くと、もしかしたらマナド-ビトゥンの主要道路を祖父も歩いていたのではないかと、トモホンやマナドからの長い道のりをビトゥンを目指し、日本兵を見送る現地の人たちの視線を浴びながらシオン教会を過ぎ、ビトゥンの市街地を越え、港へと続く通りを疲れきった身体でそれでも帰国への喜び満ちて歩いて行ったのではないかと…等と想像してしまう。

そうした祖父のことやマグロビジネスで来ていた主人と知り合ったのもビトゥンということもあり、少なからずセレベスに縁があったのだと今更ながらしみじみ思う。

「縁あってきた国ですから、1つでも多くこの国のこと、人、ものを見つけられるように…」
派遣前に恩師がくれたことばが過る。

あとどれくらいここ北スラウェシに滞在することになるかはわからないが、これから出会う多くの出来事や人なり文化なりを、新たな「縁」と思い、豊かな人生を築いていきたい。

追伸

JICA在任中に祖父を偲んで日本兵墓碑等にお参りに行きたいと考えていたところ、2009年の終戦記念日にマネンボネンボの慰霊塔にて慰霊祭に参加させていただき、意が叶いました。ありがとうございました。

また、ビトゥン赴任中長崎さん、平野さんを始め多くの日本人会の方にお世話になりました。

去る2011年1月に入籍致しました。この場を借りてご報告させていただきます。

まだまだ未熟な2人ではありますが、共に支え合っていきたいと思います。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

本誌第17号(平成21年8月)の表紙のモデルになった関野吉晴さんの古代カヌー「縄文号」、その後カヌーの消息が消えて気になっていましたが、去った7月6日のYAHOOニュース(毎日新聞配信)に現れました。

2009年4月に中部スラウェシを出発したカヌー「縄文号」、はパラワン島、ルソン島などを經由して今年6月13日目的地石垣島に到着したそうです。スラウェシから石垣島まで約4,000キロの行程を3回にわけて、のべ約8ヶ月の航海でした。

関野吉晴さん(武蔵野美術大学教授・文化人類学)の航海の目的は、古代人が日本にたどりつきたいいくつかのルートの中の「南方からの海上ルート」の検証というところでしょうか。

沖縄から九州南部、四国、紀州などの太平洋側に住む日本人は南方系の血が濃いといわれています。地図をみてもインドネシアの島々から日本列島まで飛び石のように島が続いていて、琉球列島・薩南群島から九州南部四国紀州などは、南の島々から日本に向かう通路であり玄関であるのですから当然のことでしょう。

しかし、大昔の人々(古代人)は南の島々から日本まで実際にはどのように渡ってきたのだろうか。関野教授は今回、「カヌー」を渡航手段の象徴としてとりあげたわけですが、古代人がインドネシア方面から日本までたどりつくのに使われた移動の手段はカヌーだけではないでしょう。海上の移動はカヌーまたは筏が使われたとしても、移動途中では徒歩による陸上の移動も含まれていたと考えられます。(古代人の居住地が主に海沿いの土地であることを思えば、移動手段はカヌー、筏の利用がメインであったでしょうが)

古代人の、南方から日本列島までの移動を考えるうえで見落してはならないことは、移動には距離(地理)的な要素だけでなく時間軸もあるということです。スラウェシ島に住んでいた古代人がツアーを組んで、カヌーを操って一気に日本列島を目指したわけではないでしょう。普通に考えられる彼らの行動(移動)は、まず食料調達かなにかの理由で目の前にある島(土地)に移って、その土地が住み心地よければそのまま定住する。状況が変わって住みにくくなれば次の土地へ移動する。移動は家族ごとあるいは種族ごとであったかも知れず、一人だけの場合もあったでしょう。奥さんにいじめられて旦那だけ逃亡したケースも考えられます。しかし大まかにみれば、ある程度の大きな集団で少しずつ北へ移って行く。移動するタイミングも、ある場所に移つ

てきて間をおかずに次の土地へ移動したことも考えられるし、何世代も1ヶ所に定住したあとの移動ということも考えられます。移った土地がみかけによらず貧弱なため、長居せずに次の土地へ移動したということもありえます。また、縄張り争いみたいなことで他の種族に追われることも考えられます。長い年月かけて何世代にもわたってじわりじわりと移動拡散して、気がついたら南で発生した人種が日本列島の住民になっていた、ということではないでしょうか。

「ヒト」の群れが南から北へ動いたと考えるより、血（遺伝子）が拡散浸透して日本列島に達したと考えるほうが、イメージとしては適切かと思います。

ひとつ気がついたことは、南方圏から日本列島への「血」の移動は古代で終わったわけではなく現代も続いているということです。また、南から北へ向かうベクトルだけでなく、北から南への移動もあります。北スラウェシがらみでいえば、昭和初期に北（日本）からスラウェシへの大量の「血の移動」がありました。

ひとつは沖縄漁民を主体とする日本人漁業者のビトゥンでの活動によるものです。今手元にある記録だけでも終戦時までに50人近い漁民および漁業関係者が当地の女性との間に子をもうけ、その子孫は今も増え続けています。沖縄県民は、いちおう南方系の血が濃いということですが、昭和戦前期にはその南方系の血が南に逆流した感があります。

あとひとつは兵隊さんです。日米開戦と同時に北スラウェシ（当時は蘭領インドネシア）にも日本軍がやってきました。初期のオランダ軍との戦闘がありましたがそれは簡単に終わって、そのあと終戦間際の連合軍による空襲まで、3年間ほどのんびりした期間があつて、当地の女性との間に「兵隊さんの子供」ができました。軍人の場合はその立場上、漁業関係者のように腰をすえて世帯を持つというわけにはいかなかったでしょうから、子供の数もそれほど多くないようであることはよくわかりません。

昭和戦前・戦中期のあと、戦後にもビトゥンには漁船乗りや漁業会社の駐在員などが断続的にやってきて、地元女性との間に子供をもうけています。また、今この時点でも本会会員の幾人かは地元女性あるいは男性と結婚していて、日本人の血が混じる子供を増やしつづけます。

このように南の血と北の血が着々と混合攪拌され、何百年か後には「ミナハサ人のルーツは日本人」というのが定説となり、メナドの大学教授・学生が、「わたし達の先祖はどのように日本から渡ってきたか検証しよう」と言い出して、昭和初期の漁船をモデルに「古代（＝大正・昭和時代）のかつお釣り漁船」を建造し、琉球列島、フィリピン群島沿いにとことこビトゥンをめざし

て航海する、ということがあるかもしれません。大正・昭和初期ともなると、かつお釣り漁船にも内燃機関というものがついていて石油を燃料に動くわけですから、関野教授のカヌーと違って那覇からビトゥンまで、途中休み休み航海しても20日たらずでビトゥンに到着です。

(航海終了)

会員募集

PT. ARTA SAMUDRA

今泉 宏

自転車サークルの会員を募集しています。

◆活動内容

月に1、2回ほど2、3時間のロードコースを自転車でのんびり走り汗を流すことを目的としたサークルです。北スラウェシ地区のサイクリングに適するコースを開拓しています。将来的にはオフロードのクロスカンントリーなどもやっていこうと思っています。

◆現会員

坂口 純

今泉 宏

◆コースの紹介

①ビトンータテル

所要時間2時間、走行距離30km(?）、中級者向け。

ビトンからギリアンまでは大通りを走り、ギリアンから北へ向かいピノカランで東へ折れ、ゴミ捨て場、アペラ、クラバットなどの村を通過しタテルへ抜けるコースです。

かなり傾斜のきつい坂道もあるので筆者は2度ほど自転車から降りて押して登りました。その2箇所ほどの難所を越えたらあとはクラバット山を眺めながらのんびり走れます。標高がかなり高いためか涼しく空気が澄んでいて気持ちの良いコースです。

ゴールのタテル村には筆者の別荘(?)があり、鯉やティラピア、ウビなどのご馳走が待っています。当初は折り返してビトンまで帰ることを計画していたのですがついビールを飲んでしまい、都合の良いことに雨まで降ってきたので車に迎えに来てもらって帰ることになりました。

②ビトンーバトゥ・プティ(タンココ)

所要時間2時間、走行距離30km(?）、初中級者向け。

ビトンからピノカランまではタテルコースと同様で、そこから北へ北へと走り、ドウア・ソウダラ村などを經由し、バトゥ・プティへ抜けるコースです。

ギリアンからとにかくゆるい傾斜を登り続けます。うっそうとした原生林の中を通り抜ける時などは街の雑音は一切聞こえず、虫や鳥の鳴き声、遠くから聞こえる沢の流れ

る音だけが聞こえます。そんな場所ではマイナスイオンを一杯吸い込むためか体が浄化されるような感じを受けます。ドゥア・ソウダラ山をいつもとは反対側から望み、タンココ国立公園が近づくにつれ原生林がさらに濃くなっていきます。上り坂を登りきるとあとはひたすら下りです。傾斜はこちらのほうがきついので帰り道が大変です。(帰りは車に迎えに来てもらいましたが・・・)坂を下りるとタンココ国立公園へ訪れる観光客のためのヴィラやロスメンなどが見えてきます。国立公園の入り口を通り過ぎて少し行くとバトゥ・プティ村に到着です。程よく空腹となり村で食堂を探すも見あたらず、日曜日の午前だったこともあり皆教会へ行っていて見つけた数箇所の食堂も休業中。しかし空腹でやっと見つけたワルンで食べたフルーツカクテルは絶品でした。そこからもう一つ小さな峠を越えるとリゾート(名前は忘れた)があり、結局そのリゾートでナシゴレンにありつくことができました。このコースは筆者一番のお気に入りです。

③トンダノ湖一周

所要時間2時間、走行距離40km(?), 初級者向け。

ビトンから車でロンボカン・リゾート(?)まで行き、そこからトンダノ湖を一周するコース。距離は少しありますが、平坦なコースなので初級者でも簡単に完走できます。田園風景と湖を交互に眺めながらのサイクリングは最高です。途中湖岸のレストランで食事休憩を取り、鯉、ティラピア、ニケなどを食べましたがこれも絶品でした。最後は温泉につかり疲れた体を癒してしめるというなんとも贅沢なコースですね。日陰が少なく直射日光を浴びるので日焼け対策が必要です。

④ビトン・タンドルサーマカウィデー・カサワリー日本人墓地ービトン

所要時間3時間(?), 走行距離30km(?), 上級者向け。

このコースは以前に筆者が単独で行ったものです。タンドルサからマカウィデー、カサワリーを経由し日本人墓地の前を通ってウィネネット、ビトンへ出るコースです。タンドルサまでは比較的楽に行けますが、水上警察からクンクンガン・リゾートの上を通ってその先はひたすら急勾配の登りです。本来はレンベ海峡を見下ろしながらの景色の良い道なのですが景色を楽しんでいる余裕はありません。途中かなり自転車を押して登りました。頂上へ達したらあとはマカウィデー村まで急坂を下るのみです。村の端まで行くと斜面に沿ってリゾートが建っています。その脇の道を登ると舗装道路がなくなり獣道のような山道になり、下りきるとカンバフ村が現れます。さらに未舗装道をしばらく走るとカサワリー村に着きます。カサワリーからはきれいな舗装道路となりますが勾配のきつい登りでほとんど自転車にまたがることなくひたすら峠の頂上へ向かって自転車を押して登りました。この峠を越えてしばらく下ると日本人墓地があります。

さらに下ると道の両側に立派なお墓がいくつも見られ、それらを眺めながらウィネネットのパスールまで下りきってゴールです。

このコースはサイクリングには適さないと一度封印をしたのですが、単独ではなく仲間と一緒にならもう一度挑戦してもよいと思っています。

⑤トモホナーメナド

トモホンからメナドまでの大通りではなく脇道を走るコース。近日中に走る予定です。

トンダノ湖一周コースより



ビトナーバトゥ・プティコースより



日系人メモ（２）・大城ミレイ

長崎 節夫

ビトゥンに住み着いてかなりの期間、遠出する際は白タクを利用していました。ある日メナドに行く用があって、いつもの白タクの運転手に電話しました。「今日は別の客があるから代わりに友達の車をよこす」ということで、やって来たのが大柄で色白の青年Ｊ君でした。

メナドへの車中、Ｊ君が「私のオパはジャパンだ」というのです。おじいさんの名前はオオシロミレイで、かつお釣りの漁師であったこと、お父さんの名前はタケシでもう亡くなった、おじいさんは終戦後オキナワに帰ってから一度手紙が届いたが今は音信不通。たぶん、もう亡くなった。

次の日に、ビトゥンの長老、大岩トミさんを訪ねました。

「昨日大城ミレイの孫だという人に会ったけれど、大岩さんご存知ですか。」

「よく知っている」ということで話してくれました。

「Ｊ君の父親は日系人としてはめずらしいことに軍人であった。それも空挺隊の士官でエリートであったから長生きしていたら出世していただろうに、酒を飲みすぎて早死にしてしまった」。

軍人である大城二世は体が大きく酒も強い豪傑であった。役所にも顔が利くので沖縄系の住民から頼りにされていたらしい。

ほんとに惜しいことでした。しかし、おじいさんの名前を最初に聞いたときから腑に落ちないのが「ミレイ」という名前です。妙にしゃれた名前だが漢字でどのように書くのか。まさかカタカナ名前ということはないだろうし。（この謎はあとで解けました）

出身地が沖縄県糸満ということは分かったので、帰省したおり早速畏友金城力人君と「大城ミレイ」捜しにかかりました。漁業組合がとっかかりになると考えて、糸満漁業協同組合に金城宏組合長を訪ねました。用件は前もって伝えてあったので、「心当たりがある」ということで年配の組合員Ｕさんが一緒に待っていました。

Ｕさんと一緒に糸満市内のある洋装店を訪ねました。店主は大城ミレイが戦後沖縄に引き揚げてきてからの子供らしい。いろいろやり取りする中で、大城ミレイの本名は大城陣十郎であること、（ミレイはあだ名とのこと）、終戦後南方から帰ってきた陣十郎さんは酒癖が悪くて周囲をこまらせたこと、体が大きく力持ちであったことなどがわかりました。ビトゥンのＪ君の体つきやお父さんのタケシさんの姿を彷彿させるもので、ほぼ間違いないと思えます。しかし、突然現れた南洋の兄弟の存在に、店主のＯさんはとまどっているようです。「姉さんや親戚に確認してから」と慎重です。同行したＵさんが「南洋にも親戚がいるとはいいいことではないか、めでたいことだ」と言ってその場は終わりました。

後日、Oさんから電話があつて金城君と二人で洋装店へ出向きました。「あのあと家族親戚で話し合ったが、陣十郎はインドネシアに行った形跡はない、この話はなかったことにしてくれ。」と不自然な釈明です。家族親戚の事情もいろいろあることでしょうからそれ以上問い正す必要もないし、「わかりました」でおわりました。

「オオシロミレイ」から数えて三世にあたる JERRY 君はエレクトーン演奏の名手で、我が家のノファやナルコの誕生会には音楽担当でパーティーを盛り上げてもらっています。

1 世 大城 ミレイ (陣十郎?) (歿)
 (妻) STIEN MAMUAJA (歿)

2 世 (長男) WELLY(TAKESHI) MAMUAJA (歿)
 (次男) FREDY MAMUAJA (2009 年歿)

3 世 (WELLY の子供) TAMY MAMUAJA (37 歳で歿)
 JAMES MAMUAJA (35 歳で歿, 子供ナシ))
 FAIBI(YURIKO) MAMUAJA
 JERRY(KENJI) MAMUAJA (1968 年 1 月 17 日生)

 (FREDY の子供) SONI

4 世 (FAIBI YURIKO の子供) : 男子 1 名 女子 1 名
 (JERRY KENJI の子供) : 男子 2 名 女子 1 名
 (SONI の子供) : 男子 1 名

5 世 (FAIBI YURIKO の孫) : 男子 1 名、女子 1 名

* 大城ミレイ (陣十郎?) の子孫は、三世が 2 名、四世 6 名、五世 2 名、合計 10 名 (2011 年 6 月 30 日現在)

平成 23 年 3 月 11 日

長崎 節夫

平成 23 年 3 月 11 日は日本国の歴史に深く刻まれる一日となりました。

当日、私は所用でトモホンまで行き、帰る途中の夕方 4 時ごろ、ギリアンを過ぎてマディディルにさしかかったところで今泉さんからケイタイがはいりました。「関東や東北で地震と津波があった。津波がやがてここまで来るらしいから長崎さんのところへ避難に行っているか」とのことです。

5 分ほどで帰宅、ほとんど同時に避難民の今泉親子も到着したので、2 階のベランダにテレビを持ち出してスイッチをいれました。

テレビ（NHK）の画面には、大げさなハリウッド製映画みたいな津波の映像が現れました。仙台、釜石、石巻などの津波の映像がくり返されるなか、陸前高田や南三陸町は壊滅状態らしく連絡もとれないとか、名取地区の海岸に 200～300 人ほどの水死体があるとか、悲惨なニュースが流されてきます。

気がつくともトウンの家のまへの通りは、いつの間にか車やバイクの通行量がふえて、警笛や排気音で賑やかになっていました。バイクはほとんど 2 人乗り～4 人乗りで、リュックを背負っているのが目立ちます。あとで聞きましたが、メナドでもトモホンなど山手へ向かう通りが大混雑であったそうです。

テレビを見ながら思い出したのは、6 年前のアチェの大津波の映像です。あのときの映像は、市街地に海水がじわじわと侵入してくる感じでした。「これなら小走りで逃げられるかな」と思いながら見ていました。今回の東北地方の津波映像は、海水の動くスピードがアチェの場合とは違います。釜石や石巻の市街地をおそう激流は普通の人の駆け足では逃げられないという感じです。避難した高台から写したものらしい映像がありました。海水が迫った住宅地の道路を走って逃げている人の姿がチラッと映っていましたが、あの人は逃げきれなかったのではないかと。今回の津波は昼間のできごとでもあり、またビデオカメラやケイタイが普及していることもあって、映像記録が多いのが特徴のようです。アチェの場合も昼間でしたが映像記録が少なく、内陸部の勢いの衰えた映像しか見られなかったためか、津波の迫力が違うように感じたかも知れません。

津波の国際共通語が「TSUNAMI」であることからわかるとおり、津波は日本のいわば「名物」です。私たちは子供のころから津波のことを話に聞いたりニュースとして聞いたり、また実際に体験したりしています。

津波体験といえば思い出すのは高校在学中のチリ津波ですが、沖縄での被害は小さくて、農家のヤギがおぼれて死んだという新聞記事をおぼえています。

津波についての一番古い記憶は、まだ若かったおばさんたちの教科書だかにあった「い

なむらの火」という話です。私が小学校に入ったところかあるいはその前であったか、自分で読んだのか誰かに読んでもらったのか忘れましたが、話の筋だけはなんとなく記憶に残っています。津波の際の引き潮で、村の人々が干上がった海底にとびはねている魚を拾うために海岸へ行くのを、庄屋さんが、刈りとったばかりの稲に火をつけて「警報」を発して高台に呼び戻したという話です。まだ幼かった私の頭に「急に引き潮になったら津波の前兆」と、インプットされました。

沖縄における歴史的な津波は、今から 240 年前、1771 年 4 月に八重山群島・宮古群島をおそった「明和の大津波」です。石垣島では波の高さ 40 メートル、波の駆け上がり高さは 85 メートルという巨大津波です。八重山群島・宮古群島に甚大な被害をもたらしましたが、特に石垣島の被害が大きく、津波前の人口 17,349 人のうち死亡・行方不明 8,439 人。死亡・不明率は実に 48.6%にもなる大惨事となりました。このような大災害が文書にも残っており、津波石などの津波の痕跡も実在するにもかかわらず、年月が経ったということで人々の記憶から消えて、いまでは遠い歴史上の事件として扱われるだけで、現実の問題として誰も気にとめていないようにみえます。天災は忘れたところにやって来る。沖縄のみなさんは今回の東日本の震災を他人ごとだと思っはなりません。

東北地方もふくめて日本本州の太平洋側一帯は歴史的にも大地震とそれに伴う大津波をくり返しています。地震研究は昔とくらべて格段に進歩しているし、行政当局も堤防を築いたり避難訓練をおこなったり、それなりに対策をたてていました。それでもまた今回の大惨事になってしまいました。何故そうなるのか。テレビで責任のある立場にいる人たちが「想定をこえる大地震、それによって引き起こされた想定を超える大津波であった」と簡単に話しているのを聞いて、少し腹が立ちました。

今回の津波による被害は人災の部分が大いように思います。三陸方面は昔から大地震大津波の発生地です。地震予知の研究も進んでいて、今回の地震も「30 年以内に 85% の確率で発生」と予想されていました。震源域が広すぎたという「予想外」のことはありましたが、予報としては一応ドンぴしゃりと言ってよいと思います。それでもこれだけの惨事になりました。おそらくあと 100 年後か 150 年後かにまた大地震がおこります。そしてまた大惨事となる可能性が大いと思います。

のど元すぎれば熱さ忘れる。痛い経験が教訓として伝わらない。日本人の限界ですか。

次は東海、東南海、南海の地震（それともなう津波）と予想されています。この三つの地震が連動しておこる可能性もあるそうです。東京直下型地震を警告する学者も少なくありません。東海地震が 30 年以内におこる確率は 85%、南海地震は 60%といわれています。「30 年以内におこる確率 85%」というのは、明日おこっても不思議ではないということです。目のまえに迫ったこれらの地震・津波に対する抜本的な防災対策は、今からではとうてい間に合いませんが、せめて避難対策、救助・救援対策だけでもしっかりと

てもらいたいものです。被災予想地域の設定、地域住民に対する指導、警報の出し方、緊急時の避難経路の確保、被災後の救援のあり方などについては、関東大震災など過去の事例や今回の東日本大震災から得た教訓はいっぱいあると思います。

今回の東日本の被災状況、あれもこれも悲惨なできごとには違いありませんが、最も残念に思ったのは石巻の大川小学校の件でした。保育園、学校などの立地については今後真剣に考えざるを得ないでしょう。また、治にあって乱を忘れず。いざというときどうするか。学校の先生方、関係機関の皆様は、天災というものは予告なしにやって来るということを、忘れないでもらいたいものです。わが沖縄県でも、少なからぬ地域で、たぶん広い用地が得られるとか通学に便利だとかの理由で、海岸沿いの埋立地などに学校が建てられています。いざという時の避難対策が万全であることをねがっています。

今回の東日本の震災にダメ押しをしたのは福島原発事故です。地震・津波の自然災害はやむを得なかったとしても、「この事故さえ無ければ」と日本人の多くが思っていることでしょう。「津波」というパンチが、日本の急所・弱点に強烈に入ったということでしょうか。これで日本国はダウンしました。なんとか立ち上がれるでしょうがやはりダメージは大きく、立ち上がってからもダメージを回復するには時間がかかります。

しかし、災い転じて福となす、ということわざもあります。この災害を奇禍として皆が知恵を出しあってひと踏ん張りすれば、新しい日本のすがたが見えてくるのではないかとかすかに期待しています。

月刊誌「文藝春秋」平成23年5月号は震災特集を組んで、被災当事者の体験記事、各界の著名人などの提言など、防災・復興計画を考える上で有益な記事が並んでいます。その中のひとつ、壊滅状態になった宮城県南三陸町町長・佐藤仁さんの手記の抜粋を紹介します。被災当事者の体験記から多くの教訓がくみとれます。

(「文藝春秋」平成23年5月号より)

屋上のアンテナが救ったわが命

宮城県南三陸町長 佐藤 仁

地震があったのは、町議会の閉会日でした。その二日前の三月九日にも地震があったばかりでしたので、私はちょうど、「災害に強い町づくりを続けていきたい」と閉会の挨拶をしていました。そうしたら、あの強力な震度6弱、隣の防災庁舎の二階にある危機管理室に急いで移動すると、すぐ大津波警報が出て、町民の皆さんに、高台への避難を呼びかけました。その二十分後ぐらいだったと思います。階上から「津波だ」という声が聞こえてきて、私も屋上に上がったんです。

うちの防災計画は、基本的には51年前のチリ地震津波、それともう一つ、宮城県沖地震

の連動型という想定があり、高さ 6.5 メートルの津波を基準につくられています。そして、チリ地震の被害範囲より少し広げた町内のエリアに、看板を立てています。「津波浸水区域」「ここから津波浸水区域を外れました」と。ですから、奥の方の住民は普段から「自分のところには来ない」という意識を持っていたんです。

三階建ての防災庁舎屋上に上がったときも、津波がそこまで来るなんて誰も思っていない。私ももちろん思いませんでした。私たちは避難するためではなく、津波を目視するために屋上に上がったのです。

ですからまだ、二階で仕事をしている職員も大勢いた。県庁の職員もいたし、消防署の副所長、町議会を取材にきた記者の方もいました。皆さん、たぶん行方不明になってしまったと思います。

南三陸には、昨年二月二十八日もチリ沖の地震で津波が来ましたが、新しく耐震化、延命化した水門で完全にシャットアウトできました。ですから、率直に言って、津波に関してはこれでもう完璧だ、という自信がありました。

昨年のケースも、防災庁舎を本部にして、大津波警報が出て、対応は同じです。二日前の三月九日はただの津波注意報でしたが、やはり同じです。しかし、かと言って、そのせいで“オオカミ少年”の物語のように気が緩んでしまった、ということはありません。今回は揺れが全く違いましたから。とにかく立ってられない。私は宮城県沖地震だ、と咄嗟に思いました。議会では皆、机の下に隠れました。

家屋の倒壊はほとんどありませんでした。うちは基本的に下が岩盤なんで地震には比較的強いのです。しかし、津波の大きさはケタ外れでした。高さ八メートルの水門をはるかに超えていた。これはもうダメだ。その光景を見て、チリ津波なんてものじゃない、と初めて現実を知りました。

津波のとき、庁舎全体では職員が四十人くらいいました。屋上にいたのが三十人くらい。津波が来るまでの時間は三十分ほどだったでしょう。もともと宮城県沖地震で津波が来るのが二十何分と言われていましたから、その意味では想定内でした。

準備はして来たんです。南三陸では、昭和三十五年のチリ地震津波から五十年間、五月二十五日の記念日には毎年、避難訓練をやってきました。チリ地震津波では、県内で一番被害が大きく、四十一人が亡くなったものですから。

しかし今回の津波は、どんな学者さんだって想定はできなかったと思います。チリ津波と同じ高さの五・五メートルの防潮堤をつくって、これで万全だということで今までやって来たのに、結局、何の意味もありませんでした。防潮堤をつくって囲い込む町づくりはもう卒業すべきかもしれない。そんな風にさえ思います。

私たちのところに来た時、津波はたぶん十五メートルくらいあった。私はアンテナの近くにある手すりにしがみつきました。多くの職員は、屋上の周りのフェンスにすがったと思います。私のすぐ下に副町長がいました。隣には総務課長がいた。第一波では、首まで

水に浸かりました。その上を波が超えてくるわけです。頭の上から波がパシッと来る。と、次の波が来るまで何秒かの時間がある。そのときに、ハッと息が吸えたんです。ほんの十センチ、二十センチという差だったと思います。もう少し水位が高かったら、完全にダメでした。

私たちは、ただただ手すりを放さない。ただそれだけ。第一波はしばらくしてスーッと引きました。辺りを見渡すと、フェンスにつかまっていた二十人が誰もいない。これは辛かったですね。残ったのは、私のそばにいた十人だけでした。

本庁舎がつぶれ、議会棟もペシッとつぶれてしまいました。我々のいる防災庁舎も最初の一撃で鉄筋だけの状態になったと思います。次の一撃が来たら、もう崩れてしまうのではないかと。そんな恐怖を感じました。

津波は二波、三波と大きくなっていく。私たちは、そんな風に教わっていました。次はもうアンテナに登るしか助かる方法はない。そう思って、十人で屋上の二本のアンテナによじ登りました。辺りはもう真っ暗。そして吹雪。アンテナに登ると余震がくるわけです。激しく揺さぶられる。その下を、ゴーッと轟音を立てて津波が流れて行く。落っこちたら完全に死んでしまいます。

アンテナそのものには、足を引っ掛けるところがありませんでした。電線とか、ケーブルとか、そういうものに引っかけて登るんですが、皆、全身、ずぶ濡れになっているから、ズボンがピタッと貼りついて足が上がらない。だから、下から皆で押し上げて「登れ、登れっ」と助けあいました。腕力と足の力、それだけです。吹雪だから手の感覚はもう、全くなかったです。登れなくなったら、もう終わりでしたけど、私は言いました。

「ほかのみんながいなくなって、俺たちだけが残ったんだから、とにかく生き延びなきゃダメなんだ」と。

七波くらいまでアンテナに登りました。十五波くらいまで数えていました。アンテナと屋上を登ったり降ったりです。

十人の間で言葉はあまりありませんでした。私の隣にいた総務課長の家は庁舎のすぐ隣。奥さんが逃げられずに二階にいたんです。総務課長はその自宅がつぶれて行くのを目の前で見ていた。ですから、誰が亡くなったとか家族の話とか、そういう話は一切できませんでした。流木などに火をつけて暖をとりましたが、会話はただ、「とにかく生きるぞ」と、ただそれだけです。とにかく波の音がすごかった。ゴーッ、ゴーッという音が連続で続いていた。近くの病院の屋上にも人がいるのがわかりました。顔までは見えない。でも、こっちからも「がんばれよ一つ」、あっちからも「頑張れよ一つ」と。そんなやりとりを繰り返していました。

(中略)

町役場の職員は約二百三十人のうち、三十六人が死亡したか行方不明。大きな痛手です。人数のみならず、課長連中がけっこうはっていますから……。惜しいことをしました。

町をどのように復興して行くか、これはなかなか難しい問題です。例えば今、町の高齢

化率は30%近い。よほど国の支援がなければ、新しく住宅を建て、またここに住もう、という気持ちに高齢者の方がたはならないと思います。そしてもう一つ、やはりこれほどの大津波を体験しますと、また平地に住みたくはない、という思いを持つ人が多くなってしまいます。基幹産業の漁業者の方々は、職住接近。朝、3時、4時に起きて仕事をしますから、海の近くに家を建てたい、というのはあると思います。ただ、一般の方々が果たしてどうなのか。かといって、そうなると高台に造成をかけなければなりません。防潮堤を二十メートル、三十メートルにする、なんていうのはもう、あり得ない話ですから。

(中略)

それでも、被災から1週間以上、とにかく生きていけばいい、という思いで安否確認、そして避難民のみなさんのお世話役、道路の確保、そういうことをやって来ましたが、これからは、南三陸町を今後どうするんだ、という議論も始めなければなりません。

先日も新聞に、南三陸から出て行く二十人くらいの人の話が出ていましたが、寂しいですね。出て行く人も泣きながら出ていくんですけど、出て行かれる我々も寂しいんです。

ただ、こんな大きな災害ですけど、これを乗り越えられなかったら、日本の再生はないと思います。東日本全部やられましたからね。原子力発電の問題もありますが、これを乗り越えられなかったら、日本はもうダメ。そのためには、もうみんなで力を合わせないと。そうしないと、この高いハードルは、絶対に乗り越えられないと思います。

私たちは五十一年前の津波でも、いろいろな地域の方々からご支援をもらって、ありがたい、と思いましたが、五十一年経った今、同じように全国からこんなに暖かいご支援をいただいている。ここのを見ると、日本もまだ、捨てたもんでねえぞ、という気持ちが湧いてきます。

五十一年前の私は小学校三年生でした。家は水をかぶり、やはりトラウマになっています。でも当時は親戚にも周りにもあまり犠牲者はいなかった。今回の死亡者・行方不明者は、知り合いだらけです。毎日、何十回も泣いています。でもやはり、これを乗り越えて行かねばならないと思っています。

(完)

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

(2014 年 04 月 20 日)

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

●会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。

●各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。

会員名簿

会報「タルシウス」電子版では不特定多数の方が閲覧するため、セキュリティ上の観点より会員名簿は非公開とすることとしました。

(2014 年 04 月 20 日)

上記理由により会員名簿が非公開になりましたことをご了承ください。

●会報タルシウス（製本版）には従来通り名簿は掲載されます。

●各会員に対しましての個別の、または、尋ね人などのお問い合わせは、

直接日本人会へお問い合わせください。

該当会員に連絡後、会員より直接連絡するか該当会員の同意のもとで、

連絡先をお知らせすることといたします。

編集後記

原稿がほぼ出揃って製本に回す段階になったところに、川口さんの訃報が入りました。体調が優れないことは聞いていましたが切羽詰った状態とは思いませんでした。残念なことながら今号の「浜岡原発運転中止」が遺稿となってしまいました。川口さん、今まで本当にいろいろとありがとうございました。私たちは貴方が蒔いた種を育てていくだけです。

御前崎在住の川口さんには今号の原稿を依頼するにあたって、「できたら地震・原発関係の原稿を」と御願ひしていました。浜岡原発がらみで川口さんにも言いたいことがあるだろうと考えたわけですが、「原発運転中止」は我々の想像以上に、原発現地の皆様には深刻な問題となっているようです。政治に翻弄される無念な思いが文章の行間に読み取れます。

今号では、下村さん、小山さん、江田さん、柴田ちひろさんが、入会の挨拶をかねて登場しました。皆さんの何気ない一筆が、この会報の価値を高めます。これから身の回りの何でもないようなことでも、みんなに紹介するような軽い気持ちでどしどし書いてください。

今泉さんと坂口さんは目下自転車に凝って、休日のたびに遠乗りを楽しんでいる模様です。「会員募集中」。燃料代電気代タダ。美味しい空気もタダで吸えて、体力増進・健康維持を保証します。皆様もぜひ参加してください。

「関野吉春—古代カヌーの旅完了」。カヌー縄文号が無事沖縄に到着したことの報告のつもりが脱線してしまいました。「遠い将来、ミナハサ人のルーツは日本人、と言われるようになるだろう」。長崎さんの迷論です。笑わないでお読みください。

(長崎)